




審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2883 号	氏名	井上 貴司
審査担当者	主 査	山 本 宏 一	
	副主査	白 濱 正 博	
	副主査	大 川 孝 浩	
主論文題目：Anatomic Oblong Double Bundle Anterior Cruciate Ligament Reconstruction (楕円形骨孔を用いた解剖学的二重束前十字靱帯再建術)			

審査結果の要旨（意見）

従来の手術法にユニークな発想を取り入れた新しい術式である。

従来法の問題点を改善すべく3つの要素が取り入れられており、短期成績は良好である。

楕円形骨孔を用いただけではなく移植腱作成にも改良点があり、手術手技的には煩雑に思えたが、手術時間の延長はなく従来法をマスターしていれば十分に対応可能な手技であり特殊な専用機械も必要ない。解剖学に全く同等の走行が再現できているわけではないが、それは従来法と同じく手術法の限界と思われた。今後、目標としていた大腿骨孔部の生着状態が本当に改善されてくるのかが課題と考えられる。臨床成績のみではなく、再断裂率や画像診断における長期経過観察が必要と思われた。

論文要旨

前十字靱帯断裂における膝屈筋腱を用いた解剖学的二重束再建術は標準的な治療方法である。しかし、その臨床結果はいつも十分に満足いく成績ではない。成績不良例の要因の一つに大腿骨側における移植腱、特に後外側繊維束と骨孔の癒合不全の問題がある。この問題を解決するために、我々は、大腿骨後外側繊維側の移植腱-大腿骨孔部の癒合を改善すべく、大腿骨側の骨孔を1重束とし、脛骨側を2重束とした新たな解剖学的ACL再建術を考案した。その際、本来の解剖学的二重束再建術の意味を失わないために、大腿骨の一つの骨孔形状を単純な円ではなく、よりACLの解剖学的付着部の形状を再現するように楕円形状になるように工夫した。

本術式で40症例に再建術を行い概ね良好な成績を収め、手術中、術後における合併症もなかった。我々が考案した本術式は前十字靱帯再建術における移植腱、特に後外側繊維束と大腿骨孔における癒合過程の改善が期待できると考えている。